トルコ語とウイグル語における名詞句の構造

藤家洋昭　A. Kâmil Toplamaoğlu　Reyihan Pataer
大阪外国語大学　甲南女子大学／新疆師範大学

1. はじめに

トルコ語とウイグル語はどちらも同じ系統に属する言語で、その構造は表面的にはよく似ている。しかしながら、客観的に見てどの程度類似しているかの研究は、あまりされてこなかった。また、両言語は主辞が右側に位置する言語であるので、同じく主辞が右側に位置する日本語ともある程度の類似性を示す。そこで、本研究では、特に名詞句を選び、句構造文法の枠組みで、日本語の分析を参考にしつつ、分析記述し、両言語の平行性と相違点を示す。

2. 単純な名詞句

ここでいう単純な名詞句とは、節による修飾構造がないものである。単純な名詞句では主辞となる名詞に直接関係する現象が興味を引く。興味を引くもののひとつに格を示す形式がある。そのため本研究では特に格に注目し、両言語のデータを分析する。

2.1 格を示す形式

トルコ語とウイグル語の格については、もっぱらその用法が興味関心の中心であり、格を示す形式そのものについては、形式の単純さもあってか、あまり議論されたことがない。そこで、本研究では、格を示す形式の文法的性質を明らかにし、どのような文法範疇にいれるのが適切かを述べる。

格を示す形式一覧

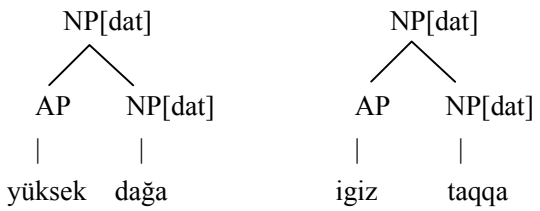
	トルコ語	ウイグル語
主格「～が」	ー	ー
対格「～を」	-(y)i	-ni
属格「～の」	-(n)in	-niñ
与格「～へ」	-(y)e	-gä
位格「～で」	-de	-dä
奪格「～から」	-den	-din

これらの形式は、ちょうど日本語の格助詞と同じように、名詞の後ろについて、格を示す。これまでの研究では、伝統的な枠組みによるもの[1][5]にしろ、生成文法の枠組みによるもの[4]にしろ、いわゆる名詞の格語尾としてあつかわれるのが普通であった。つまりこれらは名詞の一部であり、名詞自身が格を示すしるしを持つという考え方である。この考え方は一見妥当で、名詞が主辞となる構造では正しいように見える。この考え方によれば例えば、

(T1) yüksek dağa （高い・山（与格））「高い山に」

(U1) igiz taqqa （高い・山（与格））「高い山に」

の構造は次のようになる（dat は与格を意味する）。



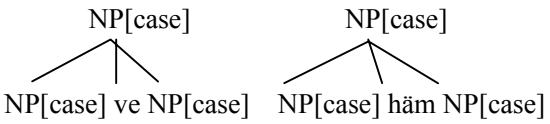
しかしながら、このような分析がうまくいかない場合がある。その一つに等位構造がある。

2.2 等位構造におけるふるまい

等位構造におけるふるまいを観察すると、以下のような興味深い事実が明らかになる。

等位構造は、トルコ語では、X Y ... ve Z ウイグル語では、X Y ... häm （あるいは wä） Z というパターンをとる。上のような分析が正しいとすれば、等位構造における格を示す形式をともなった名詞は、次のようになり、すべての名詞に格を示す形式がないと非文になることが予測される（格を示す形式を case と記す)。

(トルコ語)　　(ウイグル語)



しかしながら、実際はそうではない。データを見られたい。

(T2) Türkiye ve Özbekistan'da okudum. （トルコ・と・ウズベキスタン（位格）・勉強した（一人称単数)）「私はトルコとウズベキスタンで勉強した。」

(U2) Türkiyä wä Özbekistanda oqudum. （トルコ・と・ウズベキスタン（位格）・勉強した（一人称単数)）「私はトルコとウズベキスタンで勉強した。」

つまり、格を示す形式は、等位構造におけるいちばん最後の名詞にだけつくことが可能なのである。このことからいえることは、格を示す形式は、語ではなく、句レベルにつくということである。そうすると、形態的には語の一部に見える格を示す形式が、統語的には句のレベルにつくものであるということになる。では、この一見語尾に見えるものは何かということになる。日本語の分析では、格を示す形式はしばしば後置詞としてあつかわれる。本研究でもそれらにならい、後置詞であるとする。そして格を示す情報は、名詞本体ではなく、後置詞が持つと分析する。したがって後置詞が動詞の項ということになる。

2.3 主格ではない

例(T2)(U2)で、1 番目の名詞（Türkiye, Türkiyä ）はどう考えても主語ではなく、働きとしては、場所を示す修飾語である。また、格を示す形式が後置詞だということの意味することは、名詞には、少なくとも表面上、格がないということである。つまり、一般に「主格形」と呼ばれているものは実は主格ではない、ということになる。本研究ではこれを、値が *none* であると分析する。つまり、後置詞は値が *none* である名詞句を補語にとるのである。それでは、いわゆる文法的に主格として働いているものはどのように扱うかという問題が生じる。トルコ語もウイグル語も主格を表す形式が存在しないからである。動詞が項として *nominative* を要求しているとすると、一般名は *none* の値を持つので主語位置にくることができない。形がまったく同じで、値が *none* のものと *nominative* のものが存在するという分析も考えられるが、本研究では次に示す文法規則によって記述する。

主格名詞文法規則

NP[CASE *nominative*] → NP[CASE *none*]

これにより、文法規則が増える欠点はあるものの、主格が要求される位置の名詞句もうまく説明できる。

2.4 代名詞

代名詞にも格を示す形式がみられるが、名詞とは異なっている。一人称単数の人称代名詞を例にとると次のようになる。

	トルコ語	ウイグル語
主格	ben	män
対格	beni	meni *männi
属格	benim *benin	meniñ *männiñ
与格	bana *bene	maña *mängä
位格	bende	mändä
奪格	benden	mändin

これらは、いわゆる名詞につく格を示す形式と無関係とはいえない形をしてはいるが、決して同じではない。表面的に見ても、代名詞本体と格を示す部分を切り離すことができないように見えるものがある。形態的な面だけにとどまらず、統語的な性質も異なる。等位構造におけるふるまいを観察すると次のようになる。

トルコ語

(T3) Beni ve onu davet ettiler.　（私（対格）・と・彼（対格）・招待・した（三人称複数））「彼らは私と彼を招待した。」

(T4) *Ben ve onu davet ettiler.　（私（主格）・と・彼（対格）・招待・した（三人称単数））

ウイグル語

(U3) Meni häm uni mehman qildi.　（私（対格）・と・彼（対格）・招待した（三人称単数））「彼らは私と彼を招待した。」

(U4) *Män häm uni mehman qildi.　（私（主格）・と・彼（対格）・招待・した（三人称単数））

つまり、代名詞では格を示す形式は、いちばん最後の要素だけでなく、すべてに必要であることがわかる。このため、格素性の値は、代名詞自身がもっていると考えるのが自然である。すると、いわゆる主格と呼ばれている形は、代名詞では確かに主格である、ということになる。当然、その他の格についても、代名詞は名詞とは異なり、代名詞自身が格の値を持つことになる。

逆に、これら代名詞のふるまいとの対比からも、上の名詞の分析が妥当であることがわかる。もし、名詞が従来から言われているように格変化をするものなら、そのふるまいは代名詞と同じようになるはずである。

2.5 まとめ

以上のことをまとめると次のようになる。格を示す形式は、名詞の一部ではなく、統語的に独立した存在である。名詞の主格形は主格ではない。一方代名詞は格の値を持つ。代名詞の主格形は確かに主格である。以上についてトルコ語とウイグル語の間に大きな違いは見られない。

3. 複合名詞句

前章で見た単純な名詞句では、両言語の間には大きな違いは見られなかった。本章では、いゆゆる節の形をしたものを分析する。一般的には関係節、同格節と呼ばれているものである。ここでは、関係節を分析する。トルコ語とウイグル語の基本的データは次のようである。

トルコ語

(T5) kitap okuyan öğrenci　（本・読む-連体・学生）「本を読む学生」

(T6) *kitap okuduk öğrenci　（本・読む-連体・学生）

(T7) öğrencinin okuduğu kitap　（学生-属格・読む-連体・本）「学生が読む本」

(T8) *öğrenci okuyan kitap　（学生・読む-連体・本）

ウイグル語

(U5) kitap oquğan oquğuçi　（本・読む-連体・学生）「本を読む学生」

(U6) oquğuçi oquğan kitap　（学生・読む-連体・本）「学生が読む本」

上の例からわかることは、次のような差異である。すなわち、関係節によって修飾される名詞を主名詞と呼ぶことにすると、トルコ語においては主名詞によって連体形の形が異なる。すなわち、-DIK で終わるもの（以下、dik 形と呼ぶ）と-(y)en で終わるもの（以下、-en 形と呼ぶ）の 2 種類である。一方ウイグル語にはそのような違いはなく、-GEn で終わるもの（以下、gen 形と呼ぶ）１種類である。これら関係節について、トルコ語に関しては、いわゆる変形文法の時代から分析されてきた。比較的最近のものとして旧版の HPSG によるもの[3]もある。ウイグル語に関してはほとんど見られない。本研究では HPSG[2]をもとに分析をおこない、差異を明

示する。

上の例が示すように（トルコ語の）-dik 形は主名詞が主語以外の場合に用いられる。反対に（トルコ語の）-en 形は主名詞が主語の場合に用いられる。一方、（ウイグル語の）-gen 形は主名詞が主語であるなしにかかわらず用いられる。一般的に言って、通常の関係節によって修飾される構造では主名詞が関係節の GAP に対応する。GAP という概念を用いてこれらを一般化すると次のようになる。

-dik 形：　GAP は主語であってはならない

-en 形：　GAP は主語でなくてはならない

-gen 形：GAP は主語であってもなくてもよい

dik 形は特にとりたてていうことはない。既存[2]の項具現化原理、空所原理、空所フィラー規則との相互作用で、-dik 形からなる関係節は記述できる。既存の項具現化原理では主語が GAP になることができないので、-en 形には次のような語彙項目を与える。

-en 形：

$$\begin{bmatrix} \textit{word} & \\ \text{SYN} & \begin{bmatrix} \text{SPR} & \langle\rangle \\ \text{COMPS} & \langle\ldots\rangle \\ \text{GAP} & \boxed{1} \end{bmatrix} \\ \text{ARG-ST} & \langle \boxed{1}, \ldots \rangle \end{bmatrix}$$

-gen 形は、言い換えれば、-dik 形 の位置にも-en 形の位置にも現れるので、-dik 形 K と-en 形の両方の記述ですませればいいかもしれない。すなわち、-dik 形の記述をもつものと-en 形の記述をもつものがあるとするのである。しかし、-dik 形タイプの -gen 形と-en 形タイプの-gen 形に分けることは、単なる連体形のしるしである-gen 形であるという一般性を見ない記述である。したがって、二つに分けることは好ましくない。分けないとすると、同じ語彙項目で主語と補語の双方が GAP になりうる形にする必要がある。しかしながら、既存の項具現化原理[2]では S 主語を GAP にすることができない。そこで本研究では、項具現化原理を修正する。

ウイグル語版項具現化原理

$$\begin{bmatrix} \text{SYN} & \begin{bmatrix} \text{SUBCAT} & \boxed{a} \oplus \boxed{b} \\ \text{GAP} & \boxed{b} \end{bmatrix} \\ \text{ARG-ST} & \boxed{a} \end{bmatrix}$$

これにより、主語位置にも GAP が現れ得るようになる。

4. おわりに

トルコ語とウイグル語の名詞句の構造を特に、格を示す形式と関係節を中心に分析した。格を示す形式については、代名詞ではない名詞は格を示す形式をもたず、これまで格語尾と呼ばれていたものは後置詞であることを示した。これは両言語の間で大きな違いは見られない。一方、関係節に関しては両言語で大きな違いが見られ、ウイグル語に関しては項具現化原理の修正という形で分析した。

参考文献

[1] Lewis, G. L. (1975) .Turkish Grammar. Oxford.

[2] Sag, I. A. and Wasow, T. (1999). Syntactic Theory: CSLI.

[3] Zelal Güngördü, Elisabet Engdahl (1998). An HPSG Account of Relativization in Turkish Using Relational Constraints. Bilkent University.

[4] Şehitoğlu, O. T. (1996). A Sign-Based Phrase Structure Grammar for Turkish. METU.

[5] Zhao Xiangru, Zhu Zhining (1985), Weiwueryu Jianzhi. Minzu Chubanshe.

[6] 大谷　朗　宮田高志　松本裕治 (2000). HPSG にもとづく日本語文法について－実装にむけての精緻化・拡張－. 自然言語処理 Vol7 Num5.